

Wedge

Guiding Japan forward

May 2025 Vol.37 No.5

CONTENTS

WEDGE_SPECIAL_REPORT

18 やっぱ好きやねん！大阪 自由都市を支える「民の力」

- 20 **INTERVIEW 1** 〆なんでもあり、が最大の魅力！ 阪大名誉教授の私的・大阪論
吉森 保 大阪大学名誉教授
- 22 **COLUMN 1** 大坂商人哲学と阪大の源流 現代に甦る「懐徳堂」とは？ 編集部
- 23 **REPORT 1** まちの魅力は夜にある 大阪発・ナイトタイムエコノミー 編集部
- 26 **INTERVIEW 2** 事業継承を考える中で気づいた大阪・軽工業の面白さ
竹内香予子 平安伸銅工業 代表取締役
- 28 **DRAWING** 歩いて分かった等身大の大阪 知れば知るほど面白い 編集部
- 30 **REPORT 2** 道頓堀を彩る立体看板 人を和ませる〆自然体、のものづくり 編集部
- 32 **INTERVIEW 3** とことんこだわる造り方 「クラフトビール」を人々の記憶に
谷 和 CRAFT BEER BASE 代表取締役社長
- 34 **REPORT 3** 「見てよかった」と思える〆読後感、松竹新喜劇の笑いの源泉
山田清機 ノンフィクション作家
- 38 **OPINION** 1970年万博×SF作家 小松左京が現代に生きていたら 編集部
- 41 **COLUMN 2** 東京と違うからこそ重要 堺屋太一、大阪への強い思い 編集部
- 42 **DISCUSSION** 「豊かな日常」と「居場所」がカギ プロが語るまちづくりの要諦
村上 尚 大林組大阪本店建築事業部プロジェクト推進第一部 副部長 ×
泉 英明 ハートビートプラン 代表取締役 × 水代 優 good mornings 代表取締役
- 46 **INTERVIEW 4** 世界が求める「生活」は日本に 第二都市で行う万博の意義
服部滋樹 graf 代表、京都芸術大学芸術学部 教授
- 48 **INTERVIEW 5** 安藤忠雄 大いに語る 大阪を、日本を再び元気に！
安藤忠雄 建築家



MASATAKA NAMAZU



WEDGE_OPINION

8 **MAGAと非MAGAが大激突！
米国社会の新たな分断**

海野素央 明治大学政治経済学部 教授

12 **加速する米国不在の国際秩序
日本経済の耐久性を高めよ**

倉都康行 RPテック 代表取締役

62 **インフレで増える日本の税収
タブーなき「使い方」の議論を**

渡辺 努 ナウキャスト 創業者・取締役

WEDGE_REPORT

56 **ドイツに迫る軍靴の響き
日本だって「傍観」できない**

熊谷 徹 ドイツ在住ジャーナリスト



WEDGE_REGULARS

- 53 時代をひらく新刊ガイド | 稲泉 連 『宇宙を編む』 井上榛香
-
- 54 偉人の愛した一室 | 羽鳥好之 岡本太郎「岡本太郎記念館」(東京都港区)
-
- 60 MAGA解剖 | 大野和基 大統領首席補佐官 スーザン・ワイルズ トランプも頭が上がらない? 裏方に徹する「氷の乙女」
-
- 65 商いのレッスン | 笹井清範 経営者の志をどう引き継ぐか
-
- 66 胃袋を満たしたひとびと | 湯澤規子 坂本廣子(料理研究家)
-
- 69 MANGAの道は世界に通ず | 保手濱彰人 人間に必要なのは「夢」ではない 担える「役割」を見つけよう!
-
- 70 日本病にもがく中国 | 富坂 聡 農業でも「川上」の国へ 原種の米欧依存から脱却した中国
-
- 74 新幹線を支える匠たち | 大坂直樹 土木構造物を`健康診断、音を聞き分けて安全守る職人技(レールテック)
-
- 78 フィクサー | 真山 仁 第六章 隠蔽
-
- 86 モノ語り。 | 水代 優 手紙の書ける雑貨店 大阪・京町堀「ポスト舎」
-
- 51 一冊一会
68 拝啓オヤジ 相米周二
73 各駅短歌 穂村 弘
90 読者から/ウェッジから





MOYOUNG

WEDGE OPINION

POLITICS

MAGAと非MAGAが大激突！ 米国社会の新たな分断

2回目のトランプ政権下の首都ワシントンに現地入りして見えてきたのは分断の深刻化だ。MAGA化する米国に、日本はどう向き合うべきなのか？

筆

者は2月下旬、南部
メリーランド州で開
催された保守政治行
動会議（CPAC）

の年次大会に参加し、MAGA（Make America Great Again：米国を再び偉大にする）運動を支持するトランプ支持者を対象に、会場でヒアリング調査を実施した。その目的の一つは、「トランプ1・0」のときのMAGAたちと、「トランプ2・0」の彼らが、どのように変化しているのかを知ることであった。

CPACの大会で、筆者はシカゴから妻を同伴して参加したトム・ファイファー氏と出会い、昼食を取るなど行動を共にした。60代以上の白人男性で、中東でビジネスを行った経験があるファイファー氏がこう語

ったのだ。

「もうFOXニュースは観ていない。観るならNewsmax（ニュースマックス）だ」

ニューズマックステレビは、ジャーナリストであるクリストファー・ラディ氏によって2014年に設立された極右の新興メディアである。トランプ氏の「御用メディア」であった保守系のFOXニュースは、20年の大統領選挙でバイデン前副大統領（当時）の勝利確定を報道し、トランプ氏を怒らせた。FOXの選挙分析は正確であったが、中でも西部アリゾナ州でのバイデン勝利の予想は、特に彼を激怒させたと言われる。そこにラディ氏は、MAGA運動を支持する視聴者を奪うビジネスチャンスがあるとみて、選挙が「盗まれ



海野素央
Motoo Unno

明治大学政治経済学部 教授

心理学博士。専門は異文化間コミュニケーション論、異文化マネジメント論。2008年と12年米大統領選挙で研究の一環としてオバマ陣営にボランティアの草の根運動員として参加。著書に『オバマ再選の内幕』（同友館）など。

「CPAC2025」で、著者が出会ったMAGAたち

Wedge Special Report

大阪

—— やっば好きやねん! ——

自由都市を支える「民の力」

いよいよ開幕する「大阪・関西万博2025」。

大阪での万博の開催は、1970年以来、実に55年ぶりとなる。

この間、東京一極集中が続き、日本の停滞とともに勢いが失われていった。

そんな大阪を盛り上げようとする「熱気」や「動き」がいま、まちのあちこちで生まれている。

支えているのは、大阪独自の「民の力」、やそれを受け入れる「自由さ」だ。

大阪の隆盛に奮闘している人々の想いから、

日本の第二都市であり、自由都市であるこれからの大阪のあり方を考えたい。

山田清機、水代 優、

編集部（野口千里、友森敏雄、横上菜月、大城慶吾）

写真・生津勝隆、井上智幸、岡村啓嗣

イラストレーション・マグマ ジャイアンツ

INTERVIEW 1

「なんでもあり」が最大の魅力！ 阪大名誉教授の私的・大阪論

大阪生まれ、東京育ちの吉森保さんは東京と大阪弁の「バイリンガル」。そんな吉森さんが語る大阪論の本質は研究の世界にもつながっていた。

文・編集部（大城慶吾） 写真・生津勝隆



吉森 保 Tamotsu Yoshimori

大阪大学名誉教授

1958年大阪府生まれ。大阪大学理学部生物学科卒業後、同大学医学研究科中退。ドイツ留学ののち、96年大隅良典先生が国立基礎生物学研究所にラボを立ち上げた時に助教授として参加。その後、大阪大学医学系研究科教授などを歴任。



阪に滞在している
と、知り合い同士の
ような雰囲気包ま
れることがある。

「席詰めたるから、こっち座りや」
「寒いやろうから、カイロ使って」

取材中、小誌記者がまちの人たち
にかけられた言葉だ。



ナイトタイムエコノミー



まちの魅力は夜にある 大阪発・ナイトタイムエコノミー

大阪の魅力は言葉に表すには難しい、その雰囲気にある。
ナイトタイムエコノミーの発展でその文化は伝わっていくのか。

文・編集部(野口千里) 写真・生津勝隆

「鉄板野郎!」で乾杯する『Meets Regional』編集長の松尾さん

この大阪の持つ雰囲気はいったい何なのであろうか。京阪神で広く販売される、主に飲食店の情報を集めた『Meets Regional』(京阪神エルマガジン社)は、そのような大阪の雰囲気を詰め込んだような雑誌だ。

六代目編集長を務める松尾修平さん(46歳)は、週に5日以上まちに歩き、飲食店の店主やそこに集う人たちとの交流を欠かさない。

「かつて、中央区博労町に会社の拠点があったとき、雑誌で隣の南船場の魅力を取り上げてまちが盛り上がった経験があります。以来、取材以外にもまちに出て、実際の雰囲気を知ることが大切になっています」

常に大阪のまちと関わり続ける松尾さんは、その雰囲気についてどのように思っているのか。

「大阪人の独特の距離感からくるこの雰囲気は、大阪ならではのものだと思います。知らない人でも、息子のように接してくれることもある。大阪の面白さは、まちの人たちがつくりあげていると思います」

松尾さんの写真を撮影した中央区日本橋にある鉄板焼き酒場「鉄板野

「見てよかった」と思える「読後感」、 松竹新喜劇の笑いの源泉

テレビで簡単に楽しむこともできる大阪の「笑い」もあるが、
舞台でしか味わうことのできない濃厚な感情表現が生み出す「笑い」がある。

文・山田清機 写真・生津勝隆、井上智幸



令和6年、松竹新喜劇に入団した3人。大阪松竹座正面入り口にて撮影

MASATAKA NAMAZU

松竹新喜劇のベテラン俳優、曾我
廼家寛太郎さん（66歳）の芝居を見
たのは、かれこれ20年以上前のこと。
首をかじげた読者が多いかもしれ
ないが、筆者は縁あって以前からこ
の劇団を知っていた。そしていま、
松竹新喜劇を核に、大阪の笑いの潮
目が変わりつつあるという予感を抱
いているのである。

松竹新喜劇？

残念ながら五座は閉館されてしま
ったが、グリコの看板で有名な戎橋
のすぐ近く、心齋橋筋と御堂筋の真
ん中あたりに歌舞伎や松竹新喜劇の
公演が行われる大阪松竹座があっ
て、芝居の街の面目を保っている。

街大阪を代表する飲食店街・道頓堀
には、かつて浪花座、中座、角座、
朝日座、弁天座という五つの芝居小
屋が軒を連ね、「道頓堀五座」とも「五
座の櫓」とも呼ばれていた。道頓堀
は江戸の昔から昭和の末まで、芝居
の街、演芸の街だったのである。



阪を味わい尽くそう
と思ったら、「笑い」
の要素は外せない。
実は、食い倒れの



類の進歩と調和」とは、1970年に大阪で開催された「日本万国博覧会」(70

年万博)のテーマである。あれから55年。いよいよ、4月13日から「2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博」25年万博)」が開幕する。

本稿執筆時点(4月3日)は開幕前にあたるが、これまでに25年万博を巡っては、会場建設の遅れや軟弱地盤の問題、チケット販売の不振など、様々な課題が報道されてきた。

こうした報道は今回だけに限らない。05年に開催された愛知万博でも同様であったことを記憶している読者がいるかもしれない。しかし、愛知万博はふたを開けてみれば目標の1500万人を上回る約2200万人が来場し、大成功を取めた。

25年万博の予想来場者数は約2800万人、結果は神のみぞ知るだ。

ただ、誘致決定時から会場建設費は膨らみ続け、当初予定の約2倍にあたる最大2350億円となった。国、大阪府・市、民間企業がそれぞれ3分の1を負担するとしており、



GETTY IMAGES

入場者数約6400万人を誇った1970年の「日本万国博覧会」。アジアで初めて開催された国際博覧会だった

1970年万博×SF作家 小松左京が現代に生きていたら

開幕までに様々な困難があった大阪・関西万博。
1970年万博にかかわった小松左京が現代に生きていたら我々に何を伝えるだろうか。

文・編集部(大城慶吾)



昨

年9月に先行まちび
らきした「グラング
リーン大阪」はJR
大阪駅北側のうめき

たエリアに位置し、公園、レストラン、商業施設、ホテルなどが集まる新名所だ。大阪を拠点とする都市デザイン事務所ハートビートプラン代表の泉英明さん（53歳）は、「水都大阪」の事業推進や、タクシープールだったならば駅前を地元の人たちと一緒に歩行者天国の広場として整備してきた。大林組大阪本店建築事業部の村上尚さん（44歳）はグラングリーン大阪のコンセプトづくりの段階から携わってきた。グッドモーニングス代表取締役の水代優さん（46歳）はグラングリーン大阪で行われる様々な交流会やイベントなど、ソフト面を充実させる。3人が考えるまちづくりとは？

編集部（以下、——）泉さんと村上さんは、環境工学や都市工学専攻で同じ大阪大学（大学院）出身ですね。泉 私は東京出身なのですが、当時「環境工学」を学ぶことができる学

「豊かな日常」と「居場所」がカギ プロが語るまちづくりの要諦

DISCUSSION

誰にとっても「居場所」となる空間をどうつくるのか？「キタ」と「ミナミ」の大変革にたずさわった3人のまちづくりのプロに、その要諦について聞いた。

文／写真：編集部（大城慶吾、友森敏雄）

グラングリーン大阪の芝生広場。後ろに見える「大屋根」はイベントスペースになる。取材日は日曜日。朝から家族連れなど多くの人で賑わっていた



安藤忠雄 Tadao Ando

建築家

1941年生まれ。独学で建築を学び、69年に「安藤忠雄建築研究所」を設立。コンクリートと巧みな自然の扱いを特色とする建築で国内外で高い評価を得る。97年より東京大学教授、現在、名誉教授。

INTERVIEW 5

安藤忠雄 大いに語る 大阪を、日本を再び元気に！

大阪市中央公会堂、中之島図書館、そして、こども本の森 中之島——。
市民がつくる街、のスピリットを引き継ぐ大阪人・安藤忠雄さんに想いを聞いた。

文・編集部（野口千里） 写真・岡村啓嗣



次期首相のフリードリヒ・メルツ氏。憲法を改正し、防衛支出を大幅に引き上げる財政政策の大転換に踏み切った

WEDGE REPORT

ドイツに迫る軍靴の響き 日本だって「傍観」できない

ウクライナの戦争が西欧にも飛び火することへの不安感が強まるドイツ。「我が子が軍隊にとられる」ことに、拒否の反応を示す市民も当然いる。



熊谷 徹 Toru Kumagai
ドイツ在住ジャーナリスト

私

は、息子を絶対に戦場には行かせない。もしも私の長男が強制的に軍隊に行かされることになったら、長男を外国へ逃がす。すでにそのための準備も始めている」

今年1月、長年の友人V氏（ドイツ人）とミュンヘン市内のレストランで夕食を取っていた際、V氏は真剣な表情でこう語った。

V氏が将来当局に訴追されないように、彼の計画の詳細を記すことは避ける。だがその内容は周到であり、「成功するだろう」と思われるほどよく考えられていた。

筆者が在住するドイツでは今、兵役義務は最も議論されているテーマの一つであり、万々に備えて、子どもが戦場に送られないようにする手立てを整えつつある人々がいる。

27歳のドイツ人のポッドキャスター、オレ・ニュメーン氏は今年『私はなぜ祖国のために戦わないのか』という本を上梓し、「私は死にたくない。この国のために命を落とすのは、ごめんだ。戦闘で死ぬよりは、他の国に支配されて生き延びた方がいい」と主張している。

兵役義務をめぐる議論が起きている背景には、欧州の地政学的状況の急激な悪化がある。ドイツ政府は2011年に「ソ連崩壊後は、ドイツが攻撃される危険は減った」として、兵役義務を停止した。

兵役義務をめぐると議論が起きている背景には、欧州の地政学的状況の急激な悪化がある。ドイツ政府は2011年に「ソ連崩壊後は、ドイツが攻撃される危険は減った」として、兵役義務を停止した。



TOMOHIRO OHSUMI/GETTY IMAGES

WEDGE
OPINION

ECONOMY

インフレで増える日本の税収 タブーなき「使い方」の議論を

春闘では3年連続で高水準の賃上げが続いており、賃金と物価の好循環までもう一歩という局面だ。「普通の国の経済」へ移行するために、インフレ税の有効活用と企業経営者の意識変革が必要だ。



渡辺 努

Tsutomu Watanabe

ナウキャスト 創業者・取締役

東京大学名誉教授。1982年東京大学経済学部卒業、日本銀行入行。92年米ハーバード大学経済学博士。2011年から東京大学大学院経済学研究科で教授を務め25年に退官。15年に経済統計をリアルタイムで提供するベンチャー企業「ナウキャスト」を設立。近著に『物価を考える デフレの謎、インフレの謎』（日本経済新聞出版）。

賃上げの持続性に疑念を抱く人はまだまだいる。日本は「異常な国」から脱却できるか

世界には4種類の国々がある。先進国と発展途上国、そして日本とアルゼンチン



1960年代に活躍し、ノーベル経済学賞を受賞した経済学者のサイモン・クズネッツ（故人）はかつてこのように発言した。日本とアルゼンチンの経済成長率は「異常値」という意味だ。高度経済成長期の日本の成長率は他国と比べて異常に高かったが、低成長に喘ぐ現在の日本は別な意味で「異常な国」だ。

過去30年間における約200カ国の物価上昇率（インフレ率）を比較すると、日本は長い間ほぼ最下位に位置しており、世界から取り残される状態が続いている。クズネッツが

注目したのは経済成長率だったが、インフレ率という変数で見たとときに、日本は今もなお異常値だ。

ところが、2022年以降、少し様子が変わってきた。海外発のインフレにより日本の物価が上昇し、賃金も上昇し始めているのだ。

春闘での賃上げ率は、23年以降、高水準が続いている。1年目は3・58%、2年目は5・1%、3年目の今年は5・4%（第2回回答集計時点）だ。物価の上昇に合わせ、賃金も上昇するという認識がようやく社会に定着してきた。

今年の春闘では中小企業も健闘している。賃上げ率は4・92%（同前）と、昨年の同時期の集計（4・5%）から伸びている。とはいえ、大企業に比べれば見劣りするもので、春闘